

第3章 結果の解釈

結果の解釈は、「正答率」と「混同の傾向」を併せて行う。したがって、「正答率」が同じでも、「混同の傾向」が異なる場合には、結果の解釈は異なったものとなる。

1. 「正答率」の意味するもの — チェックシート（I）

正答率の解釈にあたっては、まず、「音声のみ」と「表情のみ」のいずれの条件が優位であるか、に注目する必要がある。これは、対象者のコミュニケーション上の特徴を知るために重要である。

また、「音声+表情」の正答率についても、結果を単独で評価するだけでなく、「音声のみ」と「表情のみ」のいずれの影響をより強く受けているのか、などについて検討する必要がある。さらに、単独ではうまく処理できなくても、「音声」と「表情」を組み合わせることによって正答率が向上する者、反対に単独では高い正答率を示すものの、双方の情報の統合がうまくいかず、全体としては正答率が低くなる者がいる。これらのことから、結果の解釈にあたっては、各条件の正答率に示された数字だけでなく、全体的なプロフィールを重視することが大切である。

チェックシート（I）は、「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の各条件の正答率に基づいて、こうした対象者毎のコミュニケーションの特徴を知るためのもので、以下の考え方に従って構成されている。

2. F & T感情識別検査 チェックシート（I）－コミュニケーションタイプの考え方－

1) 「音声のみ」と「表情のみ」と「音声+表情」の正答率に注目して分類する。その結果、

◆3条件とも健常者の9割以上であった場合は **高・受信タイプ**

◆3条件とも健常者の7割以下であった場合は **低・受信タイプ** とする。

（ここでいずれかのタイプに分類された場合は、以下の分類は行わない）

2) **高・受信タイプ** **低・受信タイプ** のいずれにも分類されない場合は、次に

「音声のみ」「表情のみ」と「音声+表情」の正答率の差に注目して分類する。その結果、

◆「音声のみ」と「表情のみ」は単独では共に低いが、「音声+表情」は高い場合は **相補タイプ**

◆「音声のみ」と「表情のみ」は単独では共に高いが、「音声+表情」は低い場合は **相殺タイプ**

とする。

（ここまでで、いずれかのタイプに分類された場合は、以下の分類は行わない）

3) **相補タイプ** **相殺タイプ** のいずれにも分類されない場合は、さらに、

「音声のみ」と「表情のみ」の正答率の差にも注目する。その結果、

◆「音声+表情」の正答率が、「音声のみ」の正答率に類似し

◇「音声のみ」と「音声+表情」が共に高い場合は **音声依存・Tタイプ**

◇「音声のみ」と「音声+表情」が共に低い場合は **音声依存・Fタイプ** とする。

また

◆「音声+表情」の正答率が、「表情のみ」の正答率に類似し

◇「表情のみ」と「音声+表情」が共に高い場合は **表情依存・Fタイプ**

◇「表情のみ」と「音声+表情」が共に低い場合は **表情依存・Tタイプ** とする。

4) 以上の手続きにより、

音声依存・Tタイプ

音声依存・Fタイプ

表情依存・Fタイプ

表情依存・Tタイプ

のいずれにも分類されない場合は、

特定のタイプには分類されない群 とする。

この群に分類された対象者は、特定のタイプに分類される特徴的な傾向は持たない。
しかし、上記のタイプと類似した傾向を有する可能性はある。

3. コミュニケーションのタイプ と その対応について

以下に、チェックシート（I）から得られた、コミュニケーションタイプ別に、どのように対応していくことが望ましいのかについて留意点をまとめた。コミュニケーションタイプは、8タイプである（表3）。

表3 コミュニケーションタイプ早見表

		音声	表情	音声+表情
①	高・受信タイプ	○	○	○
②	低・受信タイプ	×	×	×
③	相補タイプ	×	×	○
④	相殺タイプ	○	○	×
⑤	音声依存 Tタイプ	○	×	○
⑥	音声依存 Fタイプ	×	○	×
⑦	表情依存 Fタイプ	×	○	○
⑧	表情依存 Tタイプ	○	×	×

（表中の○×は、個人内で相対的に高い、あるいは低いことを示す）

① 高・受信タイプ

「音声のみ」高 「表情のみ」高 「音声+表情」高

◆高受信タイプでは、対象者は「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても正答率が高い。したがって、高受信タイプでは、対象者が「相手の感情を知ろう」とした場合には、基本的な感情であれば、言葉による状況の説明がなくとも十分に理解されている可能性が高いといえる。

しかしながら、高受信タイプであっても、対人関係に困難が認められる対象者がいる。これらの者については、『他者のおかれている状況や感情に関心を持たない』もしくは『関心を持つことはあるが、適応的な行動をとろうとしない』など、場にふさわしい行動をとろうとする構え（動機）を持たない可能性について検討しなければならない。

② 低・受信タイプ

「音声のみ」低 「表情のみ」低 「音声+表情」低

◆低受信タイプでは、対象者は「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても正答率が低い。したがって、低受信タイプでは、対象者が「相手の感情を知ろう」とした場合で、かつ相手の表出した感情が、基本的な感情であったとしても、正しく理解されていない可能性が高い。この場合は、以下の各タイプの対応を参考に日常生活の中で修正できるように配慮するとともに、当面は、言葉を利用しながらのコミュニケーションを心がける必要がある。

しかしながら、低受信タイプであっても、対人関係が一見、円滑に維持されているように見受けられる対象者がいる。これらの対象者は、

- a 「あまり強い意思表示をしない」もしくは「他者と積極的な関係を持つとしない」など、他者との関係がもともと希薄である
- b 「言語理解に優れている」もしくは、「状況や場面の理解に優れている」など、他の能力で情報を補完している

と考えられる。

a の場合は、対人関係が円滑に維持されているのではなく、終始受け身的な対応をしたり、対人関係そのものがもともと希薄であるために、問題点が目立たなくなっている状態といえる。

b の場合は、情報が適切に補完されている範囲内では、概ね、対人関係は良好といえる（ただし、言語理解や状況理解が困難な場面では、誤解が生じていたとしても、表情や音声からの情報を利用して修正することは困難である）。

③ 相補タイプ

「音声のみ」低 「表情のみ」低 「音声＋表情」高

◆相補タイプでは、「音声のみ」「表情のみ」の単独の情報では正答率が低いものの、両方からの情報を相互補完的に利用することで、全体的な正答率が高まる。

このタイプの対象者と会話をする場合には音声、表情の両方の情報が利用できるように向かい合っておこなうことが望ましい。

また、このタイプの対象者の場合、「音声のみ」と「表情のみ」において、それぞれ異なった回答傾向を一貫して持っている可能性がある。したがって、コミュニケーションに際しては、対象者の条件毎の混同の特徴をよく把握しておく必要がある。その上で、最も問題の大きい混同から、以下の⑤～⑧（音声依存型Tタイプ・Fタイプ及び表情依存型Tタイプ・Fタイプ）の配慮事項を参考に、日常生活の中で修正できるように配慮する。

④ 相殺タイプ

「音声のみ」高 「表情のみ」高 「音声＋表情」低

相殺タイプでは、「音声のみ」「表情のみ」の正答率が高いにも関わらず、両方の情報を利用可能な「音声＋表情」で正答率が低い。

相殺タイプは、「音声のみ」と「表情のみ」において、それぞれ異なった回答傾向を一貫して持っている対象者の中に稀にみられる。例えば、「音声のみ」では、「悲しみ」を「嫌悪」と誤る傾向にあり、「表情のみ」では、「幸福」を「悲しみ」と誤る傾向にある対象者が、「音声＋表情」において、それぞれの誤りを修正できず、「悲しみ」を「嫌悪」、「幸福」を「悲しみ」と誤る、などの場合である。

これらの場合については、混同の傾向について検討し、最も問題の大きい混同から、以下の⑤～⑧の配慮事項を参考に、日常生活の中で修正できるように配慮する。

音声依存（T or F）タイプ

- ⑤ Tタイプ：「音声のみ」高 「表情のみ」低 「音声＋表情」高
- ⑥ Fタイプ：「音声のみ」低 「表情のみ」高 「音声＋表情」低

◆ **音声依存タイプ**では、対象者は、音声からの影響を表情からの影響よりも強く受ける。

音声依存タイプは、さらに、音声依存・Tタイプと音声依存・Fタイプの2つに分類される。

音声依存・Tタイプでは、「音声のみ」の正答率が高く、「表情のみ」の正答率は低い。また、両方からの情報を同時に利用可能な「音声＋表情」の正答率は高い。また、その回答の傾向は「音声のみ」と類似していることも多い。

音声依存・Fタイプでは、「音声のみ」の正答率が低く、「表情のみ」の正答率は高い。また、両方からの情報を同時に利用可能な「音声＋表情」の正答率は低い。また、その回答の傾向は「音声のみ」と類似していることも多い。

◇ **音声依存・Tタイプ**に見られるような、「表情のみ」の正答率の低さは、視知覚の発達が十分ではないことと関連があることが予想される。このため、視知覚の発達に関して検査を行う必要がある。その結果、視知覚の発達に特別な困難がない場合は、訓練等により、表情から感情を読みとる能力が向上する可能性がある。

このように視知覚の発達に著しい困難が認められない場合には、日常生活においても誉めたり、叱ったりするときに、嬉しそうな声、または、怒った声で、それぞれ、「いま、とてもうれしいの」あるいは「いま、とても怒っているの」と言葉にして伝え、その後、それぞれの感情に適切な表情を対象者に見せ、「このような音声の時は、このような表情」という組み合わせを学習させることが有効である。

しかしながら、視知覚の発達に困難が認められる場合には、音声を中心としたコミュニケーションを心がけるなどの配慮が求められる。特に視知覚の発達に著しい困難がある場合には、表情に注目させることは、かえって混乱させる原因になりかねないので注意が必要である。

◇ **音声依存・Fタイプ**では、「表情のみ」の正答率が良くとも、音声からの情報を主たる情報源として利用するという対象者の傾向のために、あるいは、情報の統合に困難があるなどの理由によって、全体として正答率が低く抑えられていると考えられる。したがって、誉めたり、叱ったりするときには、必ず、対象者と向かい合い、その時々感情に適切な表情をつけて、表情を手がかりに感情を読みとるようにさせる。対象者にも「顔をよく見るように」と伝える。このように「表情」からの情報の利用を積極的に活用するように働きかけることが重要である。

また、音声情報の利用を適切なものとするために、声を掛ける際には、嬉しそうな声、または、怒った声で、それぞれ、「いま、とてもうれしいの」あるいは「いま、とても怒っているの」と言葉にして伝える。このようにして音声と言葉とを一致させ、どのような音声がどのような感情と一致しているかを学習させる。さらに、手がかりとして適切な表情を一致させることで、「このような表情の時は、このような音声」という組み合わせを学習させる。

表情依存（T or F）タイプ

- | | | | |
|---|--------------|---------|----------|
| ⑦ | Fタイプ：「音声のみ」低 | 「表情のみ」高 | 「音声+表情」高 |
| ⑧ | Tタイプ：「音声のみ」高 | 「表情のみ」低 | 「音声+表情」低 |

◆ **表情依存タイプ**では、対象者は、表情からの影響を音声からの影響よりも強く受ける。

表情依存タイプは、さらに表情依存・Fタイプ、表情依存・Tタイプの2つに分類される。

表情依存・Fタイプでは、「音声のみ」の正答率が低く、「表情のみ」の正答率が高い。また、両方からの情報を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率が高い。また、その回答の傾向は「表情のみ」と類似していることも多い。

表情依存・Tタイプでは、「音声のみ」の正答率が高く、「表情のみ」の正答率は低い。また、両方からの情報を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率は低い。また、その回答の傾向は「表情のみ」と類似していることも多い。

◇ **表情依存・Fタイプ**では、表情から他者の感情を識別することに優れていることから、誉めたり、叱ったりするときに、その時々感情に適切な表情をつけて、対象者には「**顔をよく見るように**」と伝える。その上で、嬉しそうな声、または、怒った声で、それぞれ、「いま、とてもうれしいの」あるいは「いま、とても怒っているの」と言葉にして伝える。このようにして音声と言葉とを一致させ、どのような音声がどのような感情と一致しているかを学習させる。さらに、手がかりとして適切な表情を一致させることで、「このような表情の時は、このような音声」という組み合わせを学習させる。

◇ **表情依存・Tタイプ**では、「音声のみ」の正答率が良くとも、表情からの情報を主たる情報源として利用するという対象者の傾向のために、あるいは、情報の統合に困難があるなどの理由によって、全体として正答率が低く抑えられていると考えられる。

表情依存・Tタイプに見られる「表情のみ」の正答率の低さは視知覚の発達が十分ではないことと関連があることが予想される。このため、視知覚の発達に関して検査を行う必要がある。その結果、視知覚の発達に特別な困難がない場合は、訓練等により、表情から感情を読みとる能力が向上する可能性がある。

このように視知覚の発達に著しい困難が認められない場合には、日常生活においても誉めたり、叱ったりするときに、嬉しそうな声、または、怒った声で、それぞれ、「いま、とてもうれしいの」あるいは「いま、とても怒っているの」と言葉にして伝え、その後、それぞれの感情に適切な表情を対象者に見せ、「このような音声の時は、このような表情」という組み合わせを学習させることが有効である。

しかしながら、視知覚の発達に困難が認められる場合には、音声を中心としたコミュニケーションを心がけるなどの配慮が求められる。特に視知覚の発達に著しい困難がある場合には、表情に注目させることは、かえって混乱させる原因になりかねないので注意が必要である。

最後に、検査の開発にあたって健常者を対象に行われた結果から、基準となる正答率を表4に示す。

表4 健常者における正答率

「音声のみ」	「表情のみ」	「音声+表情」
84.2 %	84.2 %	91.9 %

4. 「混同の傾向」の意味するもの

混同の傾向を解釈するにあたっては、まず、快—不快の混同があるか、に注目する必要がある。正答率に基づく評価では、大きな問題が指摘されない対象者であっても、快—不快の混同が認められる対象者がいる。これらの対象者の場合、日常生活の中では、正答率から予想されるように、全体としては相手の感情を正しく読みとれるため、快—不快の混同があることに気づかない場合が多い。しかし、快—不快の混同は対人関係におけるトラブルの原因となると考えられるため、正答率とは別に検討の必要がある。

次に、回答に一貫した傾向が見られるか、についても検討する必要がある。例えば「悲しみと嫌悪」の混同といった場合、「悲しみ」—「嫌悪」間の双方向性の混同をイメージしやすいが、実際には、常に「悲しみ」を「嫌悪」と（あるいは「嫌悪」を「悲しみ」と）誤るといった一方向性の混同が認められる場合がある。これらの対象者の場合、混同の方向性によって予想される問題が異なるため、その方向性に注目した検討が必要となる。

1) 快—不快の混同について

◆ 主として良い方に解釈する場合（不快→快）

「叱られている」あるいは、「注意されている」場面であったり、「相手が不快の感情を表現している」場面であるにも関わらず、相手の「不快」な感情を「快」の感情と読み間違える場合。

この場合は、その場に適切な対応（謝る、今している行動をやめる等）がとれず、対人関係で困難が生じ易い。

◆ 主として悪い方に解釈する場合（快→不快）

場面的には適応しているように見えるが、本人の中では、「嫌われているのではないか」「ダメだと思われているのではないか」等のストレスが高まっていることが予想される。ストレスは、ある程度まで溜まった段階で相手に対する「攻撃」となったり、自分自身に対するいらだちや無力感などと結びつく可能性があるため、心理的なサポートを必要とする場合が多い。

特に、他の心理検査や観察等から、「不安や緊張が高い」「内向的で抑圧が強い」「心因性の反応が窺える」などの特徴が指摘される対象者の場合は、混同の傾向についての検討が重要である。なぜなら、これらの対象者の場合、一見、他者とうまく対人関係を維持しているように観察される（外的な適応）一方で、そのように振る舞うために高いストレスを持っている（内的不適応）可能性が危惧されるからである。

2) 回答の一貫した傾向について

回答に一貫した傾向の見られる対象者がいる。例えば、ほとんどの感情を「幸福(嬉しい)」と判断する。または、「悲しみ」を「嫌悪」と混同したり、「怒り」を「嫌悪」と混同するが、その反対(「嫌悪」を「悲しみ」、あるいは「嫌悪」を「怒り」)の混同は少ない、などの場合である。これらの傾向は、対象者が他人に対する『構え』を示す手がかりとなる可能性もあるので、結果の解釈の際には注意が必要である。特に、「幸福(嬉しい)」や「悲しみ」を「怒り」あるいは「嫌悪」と回答する傾向にある対象者には、「外界に対する不信」「周囲の人々に対する怒りや恐れ」などが観察されることがあり、こうした心理的な面での検討も必要であろう。

5. 訓練可能性の評価

最近の研究結果においては、表情から感情を判断する能力は、対人関係を維持する能力と関連性があることが指摘されている。このことは、表情から感情を判断する能力を高めることができれば、対象者の対人能力を高めることができるという可能性を示唆している。表情は言葉に依存しないコミュニケーション手段である。したがって、言語発達が未熟な幼児・児童、そして言語能力が十分でない知的障害者にも、訓練によるスキルの向上が望める領域であると考えられる。

また、対人関係の機会が豊富で、他者の表情を観察する機会が多い知的障害者では、そうでない知的障害者と比較して、表情識別に優れていることを示唆する研究もある。このことは、表情識別のスキルは、知的な能力によるだけでなく、一部は、『経験』によって補うことができるということである。したがって、表情識別能力を高めるためには『観察(経験)』に重点を置いた場面設定をする事が望ましいことは明らかである。しかし知的障害者の場合は、単純な観察学習のみから、この技術を十分に学習することが困難な場合も多い。それは知的障害者のメタ認識能力(経験に基づいて、当該課題を解決するために注目しなければならない関連のある事柄を認識すること、またこれまでに用いた解決方法と共通する要素を抽出して応用することなど)が十分でないことによる。

また、表情識別能力は、視知覚の発達とも関連が深い。なぜなら、視知覚の発達に問題がある場合には、図形である表情の識別にも困難が伴うことが予想されるからである。そして、このことは表情識別訓練においても、視知覚の発達が訓練可能性の成否を分ける重要な要因となることを示している。

一方、視知覚の発達に問題がないにも関わらず、表情の識別に困難がある対象者もいる。このような場合には、感情毎の表情の特徴を訓練によって学習することで、表情の識別ができるようになる可能性は高い。

いずれにせよ、訓練可能性を正しく見積もることは、対象者、訓練者の双方にとって重要なことである。そして、訓練可能性が高くないことが予想された場合には、積極的に周囲に配慮を求めることが重要であろう。

第4章 対人コミュニケーションにおけるもう一つの困難

1. 一般的な留意点

正答率及び混同の傾向において、特別な困難が認められない場合であっても、状況や相手の気持ちに配慮できないなどの理由で、対人関係に問題が生じる場合がある。

例えば、受信に問題がなければ（F & T感情識別検査で、いずれの条件においても正答率が高ければ）、相手の『怒り』や『嫌悪』の感情について基本的には気づくことができるが、「相手の気持ちに配慮する」という構えが十分でなければ、嫌がられる言動をやめることができない、または、その言動を繰り返すなどが起こる。

また、受信の正確さは送信（表現行動）の良さを保証しないため、受信に問題がなくとも、以下のような理由で『対人関係』に問題が生じる場合があり、評価に際しては注意が必要である。

◆ 語彙が少ない、話すのが苦手などの理由で、

相手に自分の意思や気持ち・感情を適切に伝えられない場合

このような場合は、誤解される（黙っているのは「了解したのだろう」と思われる／「特別、嫌だと思ってはいないだろう」と思われる／「話してもどうせ分からないだろう」と思われる 等）ことも多く、そのことによってストレスが溜まるなどの問題が起こることが考えられる。

また、「挨拶ができない」、「分からない場合でも『分からない』と言えない」などについては、基本的なスキルが十分ではない、という点で対人関係に困難が生じる可能性がある。

◆状況や相手の気持ちに配慮できないなどの理由で、対人関係に問題が生じる場合

これらの対象者では、対象者自身に「相手の気持ちを知ろう」という構えがある場合には、相手の『怒り』や『嫌悪』の感情について、基本的に気づくことができる。しかし、「相手の気持ちを知ろう、または、相手に配慮しよう」という構えが十分でないために、実生活の中では、適切でない発言や行動が繰り返される場合がある。これらの対象者では、経験が蓄積されにくい(前に嫌がられたことを繰り返し行う)か、嫌がられる理由について十分に理解されていない(前に嫌がられたのが、自分のどの行為・発言によるものか理解していない)場合が多く、日常生活の場面で繰り返し指導する必要がある。

具体的な行為としては、例えば、

- ① 能力や場面についての解釈は正しい(作業が遅い、吃音があるなど)が、努力による改善可能性が低いことについても、あえて直截な表現で指摘する。
- ② 同じ内容の話をしつこく繰り返す。
- ③ 個人のプライバシーに関わるような出来事を、会って間もない(それほど親しくない)人に対して遠慮なく話してしまう。

などの場合である。

このような場合には、まず、特定の合図をしたら、今の行動をとりあえずやめること、次に、特定の表情をしたら、今の行動をとりあえずやめること、等の手続きを経ながら、同時に、「なぜ、いけ

ないのか」、「何がいけないのか」について、可能であれば小グループで話し合う機会を持つことが望まれる。指導者と対象者の2名で話し合うことも重要だが、仲間が特定の発言に対してどのように感じるのかを直接聞くことも経験として重要である。

また、「他人が嫌がること」は、「自分が嫌なことと同じ場合もあれば、異なる場合もあること」、そして、「自分は気にしないことでも、他人は嫌がることもあること」などを指導者の援助を得ながら、対象者自身が自らの経験を踏まえて、互いに理解し合える場面があれば、さらに望ましい。

第5章 活用例

ここでは、視知覚の発達に基本的に問題がない、すなわち、訓練可能性が見込まれる対象者に関する活用例について記述する。視知覚の発達に困難が認められる対象者については、低・受信タイプの対応を参考にされたい。

1. 事例1 音声依存・Tタイプ/パタンL

提示された 音声	対象者の回答				合計	
	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪		
幸福	7	0	1	0	8	
悲しみ	1	4	0	3	8	
怒り	1	0	6	1	8	
嫌悪	0	3	1	4	8	正答率
合計	9	7	8	8	32	66%

提示された 表情	対象者の回答				合計	
	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪		
幸福	5	0	2	1	8	
悲しみ	2	2	3	1	8	
怒り	0	2	5	1	8	
嫌悪	0	0	4	4	8	正答率
合計	7	4	14	7	32	50%

提示された 表情+音声	対象者の回答				合計	
	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪		
幸福	5	0	3	0	8	
悲しみ	0	6	0	2	8	
怒り	0	0	8	0	8	
嫌悪	1	2	1	3	8	正答率
合計	6	8	13	5	32	69%

F & T感情識別検査 チェックシート (I)

_____ 年 _____ : 氏名 _____

(1) 「音声のみ」、「表情のみ」、「音声+表情」の正答率を記入する。

「音声のみ」	「表情のみ」	「音声+表情」
66 %	50 %	69 %

(2) 「音声のみ」と「表情のみ」と「音声+表情」の正答率に注目する。

《作業》各欄の該当する正答率に○をつける

高・受信タイプ		←————→	低・受信タイプ	
「音声のみ」	76%以上	75%~60%	59%以下	
「表情のみ」	76%以上	75%~60%	59%以下	
「音声+表情」	83%以上	82%~65%	64%以下	

《評価と基準》

- ① 「高・受信タイプ」の各欄に○が3つ、縦に揃ったら → 高・受信タイプ → 終了
- ② 「低・受信タイプ」の各欄に○が3つ、縦に揃ったら → 低・受信タイプ → 終了
- ③ ①または②に該当しない場合 → (3-1)へ

(3-1) 「音声のみ」「表情のみ」と「音声+表情」の正答率の差に注目する。

《作業》 「音声+表情」の正答率から「音声のみ」の正答率を引いて、下記のA欄に記入する。
「音声+表情」の正答率から「表情のみ」の正答率を引いて、下記のB欄に記入する。

A欄 「音声+表情」－「音声のみ」	B欄 「音声+表情」－「表情のみ」
3 %	19 %

《評価と基準》

- ① A欄とB欄が共に 15%よりも大きければ → 相補タイプ → 終了
- ② A欄とB欄が共に-15%よりも小さければ → 相殺タイプ → 終了
- ③ ①または②に該当しない場合 → (3-2)へ

(3-2) (3-1)に加えて、「音声のみ」と「表情のみ」の正答率の差にも注目する。

《作業》「音声+表情」の正答率から「音声のみ」の正答率を引いて、下記のC欄に記入する。

C欄 「音声のみ」－「表情のみ」
16%

《評価と基準》

④-1 B欄とC欄が共に 15%よりも大きければ → 音声依存・Tタイプ → 終了

④-2 B欄とC欄が共に-15%よりも小さければ → 音声依存・Fタイプ → 終了

《評価と基準》

⑤-1 A欄が 15%より大きく、
C欄が-15%よりも小さければ → 表情依存・Fタイプ → 終了

⑤-2 A欄が-15%より小さく、
C欄が 15%よりも大きければ → 表情依存・Tタイプ → 終了

⑥ ④または⑤に該当しない場合 → 特定の型には分類されない群

これらの群の中には、上記の①から⑤で検討した型には分類されないが、類似した傾向を有する対象者が存在する。

◆◆◆ 対象者の

コミュニケーションタイプ =

音声依存・Tタイプ

F & T感情識別検査 チェックシート（Ⅱ）

◆◆◆ 採点結果に基づいて、以下の項目をチェックしなさい ◆◆◆

			評価
視知覚の発達に困難が認められるか	<input checked="" type="checkbox"/> 認められない <input type="checkbox"/> やや認められる <input type="checkbox"/> 困難が認められる	○ △ ×	○
① 「表情のみ」の正答率が75%以上か	<input type="checkbox"/> 75%以上 <input checked="" type="checkbox"/> 75%未満	○ ×	×
② 「音声+表情」の正答率が83%以上か	<input type="checkbox"/> 83%以上 <input checked="" type="checkbox"/> 83%未満	○ ×	×
※ 以下、③では、「表情のみ」及び「音声+表情」の各条件についてそれぞれチェックする。 「表情のみ」、「音声+表情」のいずれかの欄に×があれば「評価」は×とする。			
	「表情のみ」	「音声+表情」	評価
③ 『幸福』の欄の混同が合計で2つ以下か (縦・横の混同の合計数)	<input type="checkbox"/> 2つ以下 ○ <input checked="" type="checkbox"/> 3つ以上 ×	<input type="checkbox"/> 2つ以下 ○ <input checked="" type="checkbox"/> 3つ以上 ×	×
※ 以下、④では、「表情のみ」及び「音声+表情」の各条件についてそれぞれチェックする。 ④-a,b,c の「表情のみ」、「音声+表情」のいずれかの欄に×があれば「評価」は×とする。 (6カ所中、1カ所でも×があれば、「評価」は×となる)			
	「表情のみ」	「音声+表情」	評価
④-a 回答欄の網掛け以外の部分の誤りは 1マスにつき3つ以下か	<input checked="" type="checkbox"/> 3つ以下 ○ <input type="checkbox"/> 4つ以上 ×	<input checked="" type="checkbox"/> 3つ以下 ○ <input type="checkbox"/> 4つ以上 ×	×
④-b 回答欄の網掛け以外の部分に2つ以上の 誤りを持つマスが3カ所未満か	<input type="checkbox"/> 3カ所未満 ○ <input checked="" type="checkbox"/> 3カ所以上 ×	<input type="checkbox"/> 3カ所未満 ○ <input checked="" type="checkbox"/> 3カ所以上 ×	
④-c 回答欄の網掛け以外のすべてのマスに 1つ以上の誤りが認められるか (ただし、『幸福』の欄はのぞく)	<input checked="" type="checkbox"/> 認められない ○ <input type="checkbox"/> 認められる ×	<input checked="" type="checkbox"/> 認められない ○ <input type="checkbox"/> 認められる ×	

訓練可能性の評価

訓練の必要な場合(3)に分類される(パターンL)。ただし、視知覚の発達に困難が認められないため、訓練による改善が期待される。

◆◆◆ コメント ◆◆◆

F & T感情識別検査チェックシート（Ⅰ）より

◆ 音声依存タイプでは、対象者は、音声からの影響を表情からの影響よりも強く受ける。

音声依存・Tタイプでは、「音声のみ」の正答率が高く、「表情のみ」の正答率は低い。また、両方からの情報を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率が高い。また、その回答の傾向は「音声のみ」と類似していることも多い。

◇ 音声依存・Tタイプに見られるような、「表情のみ」の正答率の低さは、視知覚の発達が十分ではないことと関連があることが予想される。このため、視知覚の発達に関して検査を行う必要がある。その結果、視知覚の発達に特別な困難がない場合は、訓練等により、表情から感情を読みとる能力が向上する可能性がある。

このように視知覚の発達に著しい困難が認められない場合には、日常生活においても誉めたり、叱ったりするときに、嬉しそうな声、または、怒った声で、それぞれ、「いま、とてもうれしいの」あるいは「いま、とても怒っているの」と言葉にして伝え、その後、それぞれの感情に適切な表情を対象者に見せ、「このような音声の時は、このような表情」という組み合わせを学習させることが有効である。

しかしながら、視知覚の発達に困難が認められる場合には、音声を中心としたコミュニケーションを心がけるなどの配慮が求められる。特に視知覚の発達に著しい困難がある場合には、表情に注目させることは、かえって混乱する原因ともなりかねないので注意が必要である。

F & T感情識別検査チェックシート（Ⅱ）より

対象者は、感情間の混同が著しく、訓練の必要な場合（3）のパターンLに分類される。

ただし、視知覚の発達に困難が認められないため、表情識別訓練による改善の可能性が見込まれる。

2. 事例2 相補タイプ/パタンK

提示された 音声	対象者の回答				合計	
	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪		
幸福	6	1	0	1	8	
悲しみ	0	5	1	2	8	
怒り	0	0	8	0	8	
嫌悪	0	1	5	2	8	正答率
合計	6	7	14	5	32	66%

提示された 表情	対象者の回答				合計	
	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪		
幸福	8	0	0	0	8	
悲しみ	0	6	1	1	8	
怒り	0	2	5	1	8	
嫌悪	0	1	5	2	8	正答率
合計	8	7	11	4	32	66%

提示された 表情+音声	対象者の回答				合計	
	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪		
幸福	8	0	0	0	8	
悲しみ	0	6	0	2	8	
怒り	0	0	8	0	8	
嫌悪	0	0	4	4	8	正答率
合計	8	6	12	6	32	81%

F & T感情識別検査 チェックシート (I)

_____ 年 _____ : 氏名 _____

(1) 「音声のみ」、「表情のみ」、「音声+表情」の正答率を記入する。

「音声のみ」	「表情のみ」	「音声+表情」
66 %	66 %	81 %

(2) 「音声のみ」と「表情のみ」と「音声+表情」の正答率に注目する。

《作業》各欄の該当する正答率に○をつける

高・受信タイプ		←————→	低・受信タイプ	
「音声のみ」	76%以上	75%~60%	59%以下	
「表情のみ」	76%以上	75%~60%	59%以下	
「音声+表情」	83%以上	82%~65%	64%以下	

《評価と基準》

- ① 「高・受信タイプ」の各欄に○が3つ、縦に揃ったら → 高・受信タイプ → 終了
- ② 「低・受信タイプ」の各欄に○が3つ、縦に揃ったら → 低・受信タイプ → 終了
- ③ ①または②に該当しない場合 → (3-1)へ

(3-1) 「音声のみ」「表情のみ」と「音声+表情」の正答率の差に注目する。

《作業》 「音声+表情」の正答率から「音声のみ」の正答率を引いて、下記のA欄に記入する。
「音声+表情」の正答率から「表情のみ」の正答率を引いて、下記のB欄に記入する。

A欄 「音声+表情」－「音声のみ」	B欄 「音声+表情」－「表情のみ」
15 %	15 %

《評価と基準》

- ① A欄とB欄が共に 15%よりも大きければ → 相補タイプ → 終了
- ② A欄とB欄が共に -15%よりも小さければ → 相殺タイプ → 終了
- ③ ①または②に該当しない場合 → (3-2)へ

(3-2) (3-1)に加えて、「音声のみ」と「表情のみ」の正答率の差にも注目する。

《作業》「音声+表情」の正答率から「音声のみ」の正答率を引いて、下記のC欄に記入する。

C欄 「音声のみ」－「表情のみ」
0 %

《評価と基準》

④-1 B欄とC欄が共に 15%よりも大きければ → 音声依存・Tタイプ → 終了

④-2 B欄とC欄が共に-15%よりも小さければ → 音声依存・Fタイプ → 終了

《評価と基準》

⑤-1 A欄が 15%より大きく、
C欄が-15%よりも小さければ → 表情依存・Fタイプ → 終了

⑤-2 A欄が-15%より小さく、
C欄が 15%よりも大きければ → 表情依存・Tタイプ → 終了

⑥ ④または⑤に該当しない場合 → 特定の型には分類されない群

これらの群の中には、上記の①から⑤で検討した型には分類されないが、類似した傾向を有する対象者が存在する。

◆◆◆ 対象者の

コミュニケーションタイプ =

相補タイプ

F & T感情識別検査 チェックシート（Ⅱ）

◆◆◆ 採点結果に基づいて、以下の項目をチェックしなさい ◆◆◆

			評価
視知覚の発達に困難が認められるか	<input checked="" type="checkbox"/> 認められない <input type="checkbox"/> やや認められる <input type="checkbox"/> 困難が認められる	○ △ ×	○
① 「表情のみ」の正答率が75%以上か	<input type="checkbox"/> 75%以上 <input checked="" type="checkbox"/> 75%未満	○ ×	×
② 「音声+表情」の正答率が83%以上か	<input type="checkbox"/> 83%以上 <input checked="" type="checkbox"/> 83%未満	○ ×	×
※ 以下、③では、「表情のみ」及び「音声+表情」の各条件についてそれぞれチェックする。 「表情のみ」、「音声+表情」のいずれかの欄に×があれば「評価」は×とする。			
	「表情のみ」	「音声+表情」	評価
③ 『幸福』の欄の混同が合計で2つ以下か (縦・横の混同の合計数)	<input checked="" type="checkbox"/> 2つ以下 ○ <input type="checkbox"/> 3つ以上 ×	<input checked="" type="checkbox"/> 2つ以下 ○ <input type="checkbox"/> 3つ以上 ×	○
※ 以下、④では、「表情のみ」及び「音声+表情」の各条件についてそれぞれチェックする。 ④-a,b,c の「表情のみ」、「音声+表情」のいずれかの欄に×があれば「評価」は×とする。 (6カ所中、1カ所でも×があれば、「評価」は×となる)			
	「表情のみ」	「音声+表情」	評価
④-a 回答欄の網掛け以外の部分の誤りは 1マスにつき3つ以下か	<input checked="" type="checkbox"/> 3つ以下 ○ <input type="checkbox"/> 4つ以上 ×	<input checked="" type="checkbox"/> 3つ以下 ○ <input type="checkbox"/> 4つ以上 ×	×
④-b 回答欄の網掛け以外の部分に2つ以上の 誤りを持つマスが3カ所未満か	<input type="checkbox"/> 3カ所未満 ○ <input checked="" type="checkbox"/> 3カ所以上 ×	<input type="checkbox"/> 3カ所未満 ○ <input checked="" type="checkbox"/> 3カ所以上 ×	
④-c 回答欄の網掛け以外のすべてのマスに 1つ以上の誤りが認められるか (ただし、『幸福』の欄はのぞく)	<input checked="" type="checkbox"/> 認められない ○ <input type="checkbox"/> 認められる ×	<input checked="" type="checkbox"/> 認められない ○ <input type="checkbox"/> 認められる ×	

訓練可能性の評価

訓練の必要な場合(2)に分類される(パタンK)。ただし、視知覚の発達に困難が認められないため、訓練による改善が期待される。

◇◆◇ コメント ◇◆◇

F & T感情識別検査チェックシート（Ⅰ）より

- ◆ **相補タイプ**では、「音声のみ」、「表情のみ」の単独の情報では正答率が低いものの、両方からの情報を相互補完的に利用することで、全体的な正答率が高まる。

この対象者と会話をする場合には音声、表情の両方の情報が利用できるように向かい合っておこなうことが望ましい。

また、このタイプの対象者の場合、「音声のみ」と「表情のみ」において、それぞれ異なった回答傾向を一貫して持っている可能性がある。したがって、コミュニケーションに際しては、対象者の条件毎の混同の特徴をよく把握しておく必要がある。

F & T感情識別検査チェックシート（Ⅱ）より

対象者は、訓練の必要な場合（2）のパタンKに分類される。このパタンでは、特に一貫した回答傾向に注目する必要がある。対象者の場合は、『嫌悪』を主として『怒り』と判断する傾向が指摘できる。

ただし、視知覚の発達に困難が認められないため、表情識別訓練による改善の可能性が見込まれる。

付 録

1. 記録用紙（表紙3枚・共通5枚 計8枚）
2. 正答表 （3枚）
3. 採点用紙（1枚）
4. F & T感情識別検査 チェックシート（Ⅰ） （2枚）
5. F & T感情識別検査 チェックシート（Ⅱ） （1枚）
6. 参考（表情識別訓練の適否を検討するための16パターン）

音 声

検査実施日時 _____ 年 _____ 月 _____ 日

氏名 _____

このひとは いま どんな気持ちかな

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
1				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
2				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
3				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
4				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
5				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
6				

表情

検査実施日時 _____ 年 _____ 月 _____ 日

氏名 _____

このひとは いま どんな気持ちかな

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
1				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
2				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
3				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
4				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
5				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
6				

音声+表情

検査実施日時 _____ 年 _____ 月 _____ 日

氏名 _____

このひとは いま どんな気持ちかな

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
1				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
2				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
3				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
4				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
5				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
6				

このひとは いま どんな気持ちかな

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
7				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
8				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
9				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
10				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
11				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
12				

このひとは いま どんな気持ちかな

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
13				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
14				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
15				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
16				

このひとは いま どんな気持ちかな

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
17				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
18				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
19				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
20				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
21				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
22				

このひとは いま どんな気持ちかな

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
23				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
24				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
25				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
26				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
27				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
28				

このひとは いま どんな気持ちかな

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
29				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
30				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
31				

	うれしい	かなしい	おこっている	いやだなあ
32				

正 答 表

【音声】 刺激数：32

1	さあ、行きましょう	幸福	40女性	17	お疲れさまでした	幸福	20女性
2	さあ、行きましょう	怒り	20女性	18	さあ、行きましょう	怒り	20女性
3	はさみを取って下さい	怒り	40女性	19	さようなら	悲しみ	40男性
4	さようなら	嫌悪	40女性	20	こんにちは	幸福	20男性
5	頼みたいことがあるんです	幸福	40男性	21	さようなら	嫌悪	40女性
6	さあ、行きましょう	悲しみ	20女性	22	はさみを取って下さい	怒り	20男性
7	こんにちは	幸福	20男性	23	こんにちは	嫌悪	20男性
8	お疲れさまでした	嫌悪	40女性	24	はさみを取って下さい	怒り	40女性
9	はさみを取って下さい	怒り	20男性	25	おはようございます	嫌悪	40男性
10	さようなら	悲しみ	20男性	26	さあ、行きましょう	幸福	40女性
11	おはようございます	嫌悪	40男性	27	頼みたいことがあるんです	怒り	40男性
12	お疲れさまでした	幸福	20女性	28	さあ、行きましょう	悲しみ	20女性
13	さようなら	悲しみ	40男性	29	お疲れさまでした	嫌悪	40女性
14	おはようございます	悲しみ	40女性	30	さようなら	悲しみ	20男性
15	頼みたいことがあるんです	怒り	40男性	31	おはようございます	悲しみ	40女性
16	こんにちは	嫌悪	20男性	32	頼みたいことがあるんです	幸福	40男性

正 答 表

【表情】 刺激数：32

1	頼みたいことがあるんです	悲しみ	40男性	17	さあ、行きましょう	嫌悪	40女性
2	お疲れさまでした	嫌悪	40女性	18	今日はいい天気ですね	嫌悪	20男性
3	頼みたいことがあるんです	悲しみ	40女性	19	こんにちは	悲しみ	20女性
4	こんにちは	幸福	20女性	20	こんにちは	幸福	40女性
5	今日はいい天気ですね	嫌悪	20男性	21	こんにちは	悲しみ	20男性
6	はさみを取って下さい	幸福	40男性	22	はさみを取って下さい	幸福	40男性
7	今日はいい天気ですね	嫌悪	40男性	23	こんにちは	幸福	20女性
8	こんにちは	悲しみ	20男性	24	頼みたいことがあるんです	怒り	20女性
9	さあ、行きましょう	嫌悪	40女性	25	頼みたいことがあるんです	悲しみ	40男性
10	こんにちは	幸福	40女性	26	頼みたいことがあるんです	怒り	20男性
11	お疲れさまでした	怒り	40女性	27	頼みたいことがあるんです	悲しみ	40女性
12	こんにちは	悲しみ	20女性	28	お疲れさまでした	怒り	40女性
13	はさみ取って下さい	幸福	20男性	29	お疲れさまでした	嫌悪	40女性
14	頼みたいことがあるんです	怒り	20男性	30	はさみ取って下さい	怒り	40男性
15	はさみ取って下さい	怒り	40男性	31	はさみ取って下さい	幸福	20男性
16	頼みたいことがあるんです	怒り	20女性	32	今日はいい天気ですね	嫌悪	40男性

正 答 表

【音声＋表情】 刺激数：32

1	頼みたいことがあるんです	怒り	20男性	17	お疲れさまでした	怒り	40女性
2	頼みたいことがあるんです	幸福	40男性	18	頼みたいことがあるんです	幸福	40男性
3	今日はいい天気ですね	悲しみ	40男性	19	おはようございます	悲しみ	40女性
4	頼みたいことがあるんです	悲しみ	20男性	20	こんにちは	悲しみ	20女性
5	さあ、行きましょう	嫌悪	40男性	21	今日はいい天気ですね	怒り	20女性
6	お疲れさまでした	怒り	40女性	22	はさみを取って下さい	幸福	20男性
7	今日はいい天気ですね	怒り	20女性	23	おはようございます	嫌悪	40女性
8	はさみを取って下さい	幸福	20男性	24	今日はいい天気ですね	悲しみ	40男性
9	はさみを取って下さい	怒り	40男性	25	こんにちは	幸福	40女性
10	こんにちは	幸福	20女性	26	お疲れさまでした	嫌悪	20女性
11	こんにちは	悲しみ	20女性	27	こんにちは	嫌悪	20男性
12	おはようございます	嫌悪	40女性	28	さあ、行きましょう	嫌悪	40男性
13	お疲れさまでした	嫌悪	20女性	29	こんにちは	幸福	20女性
14	おはようございます	悲しみ	40女性	30	頼みたいことがあるんです	悲しみ	20男性
15	こんにちは	嫌悪	20男性	31	頼みたいことがあるんです	怒り	20男性
16	こんにちは	幸福	40女性	32	はさみを取って下さい	怒り	40男性

提示された 音声	対象者の回答				合計	
	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪		
幸福					8	
悲しみ					8	
怒り					8	
嫌悪					8	正答率
合計					32	%

提示された 表情	対象者の回答				合計	
	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪		
幸福					8	
悲しみ					8	
怒り					8	
嫌悪					8	正答率
合計					32	%

提示された 表情+音声	対象者の回答				合計	
	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪		
幸福					8	
悲しみ					8	
怒り					8	
嫌悪					8	正答率
合計					32	%

F & T感情識別検査 チェックシート (I)

年 _____ : 氏名 _____

(1) 「音声のみ」、「表情のみ」、「音声+表情」の正答率を記入する。

「音声のみ」	「表情のみ」	「音声+表情」
%	%	%

(2) 「音声のみ」と「表情のみ」と「音声+表情」の正答率に注目する。

《作業》各欄の該当する正答率に○をつける

	高・受信タイプ	←————→	低・受信タイプ	
「音声のみ」	76%以上	75%~60%	59%以下	
「表情のみ」	76%以上	75%~60%	59%以下	
「音声+表情」	83%以上	82%~65%	64%以下	

《評価と基準》

- ① 「高・受信タイプ」の各欄に○が3つ、縦に揃ったら → 高・受信タイプ → 終了
- ② 「低・受信タイプ」の各欄に○が3つ、縦に揃ったら → 低・受信タイプ → 終了
- ③ ①または②に該当しない場合 → (3-1)へ

(3-1) 「音声のみ」「表情のみ」と「音声+表情」の正答率の差に注目する。

《作業》 「音声+表情」の正答率から「音声のみ」の正答率を引いて、下記のA欄に記入する。
「音声+表情」の正答率から「表情のみ」の正答率を引いて、下記のB欄に記入する。

A欄 「音声+表情」－「音声のみ」	B欄 「音声+表情」－「表情のみ」
%	%

《評価と基準》

- ① A欄とB欄が共に 15%よりも大きければ → 相補タイプ → 終了
- ② A欄とB欄が共に-15%よりも小さければ → 相殺タイプ → 終了
- ③ ①または②に該当しない場合 → (3-2)へ

(3-2) (3-1)に加えて、「音声のみ」と「表情のみ」の正答率の差にも注目する。

《作業》「音声+表情」の正答率から「音声のみ」の正答率を引いて、下記のC欄に記入する。

C欄 「音声のみ」－「表情のみ」
%

《評価と基準》

④-1 B欄とC欄が共に 15%よりも大きければ → 音声依存・Tタイプ → 終了

④-2 B欄とC欄が共に-15%よりも小さければ → 音声依存・Fタイプ → 終了

《評価と基準》

⑤-1 A欄が 15%より大きく、
C欄が-15%よりも小さければ → 表情依存・Fタイプ → 終了

⑤-2 A欄が-15%より小さく、
C欄が 15%よりも大きければ → 表情依存・Tタイプ → 終了

⑥ ④または⑤に該当しない場合 → 特定の型には分類されない群

これらの群の中には、上記の①から⑤で検討した型には分類されないが、類似した傾向を有する対象者が存在する。

◆◆◆ 対象者の

コミュニケーションタイプ =

--

F & T感情識別検査 チェックシート（Ⅱ）

1 ◇◆◇ チェックシートに記入するための準備 ◇◆◇
視知覚の発達に困難が認められるかどうかを検討しておく。

2 ◇◆◇ 採点結果に基づいて、以下の項目をチェックしなさい ◇◆◇

			評価
① 視知覚の発達に困難が認められるか	<input type="checkbox"/> 認められない <input type="checkbox"/> やや認められる <input type="checkbox"/> 困難が認められる	○ △ ×	注)
② 「表情のみ」の正答率が75%以上か	<input type="checkbox"/> 75%以上 <input type="checkbox"/> 75%未満	○ ×	
③ 「音声+表情」の正答率が83%以上か	<input type="checkbox"/> 83%以上 <input type="checkbox"/> 83%未満	○ ×	
※ 以下、④では、「表情のみ」及び「音声+表情」の各条件についてそれぞれチェックする。 「表情のみ」、「音声+表情」のいずれかの欄に×があれば「評価」は×とする。			
	「表情のみ」	「音声+表情」	評価
④ 『幸福』の欄の混同が合計で2つ以下か (縦・横の混同の合計数)	<input type="checkbox"/> 2つ以下 ○ <input type="checkbox"/> 3つ以上 ×	<input type="checkbox"/> 2つ以下 ○ <input type="checkbox"/> 3つ以上 ×	
※ 以下、⑤では、「表情のみ」及び「音声+表情」の各条件についてそれぞれチェックする。 ⑤-a,b,c の「表情のみ」、「音声+表情」のいずれかの欄に×があれば「評価」は×とする。 (6カ所中、1カ所でも×があれば、「評価」は×となる)			
	「表情のみ」	「音声+表情」	評価
⑤-a 回答欄の網掛け以外の部分の誤りは 1マスにつき3つ以下か	<input type="checkbox"/> 3つ以下 ○ <input type="checkbox"/> 4つ以上 ×	<input type="checkbox"/> 3つ以下 ○ <input type="checkbox"/> 4つ以上 ×	
⑤-b 回答欄の網掛け以外の部分に2つ以上の 誤りを持つマスが3カ所未満か	<input type="checkbox"/> 3カ所未満 ○ <input type="checkbox"/> 3カ所以上 ×	<input type="checkbox"/> 3カ所未満 ○ <input type="checkbox"/> 3カ所以上 ×	
⑤-c 回答欄の網掛け以外のすべてのマスに 1つ以上の誤りが認められるか (ただし、『幸福』の欄はのぞく)	<input type="checkbox"/> 認められない ○ <input type="checkbox"/> 認められる ×	<input type="checkbox"/> 認められない ○ <input type="checkbox"/> 認められる ×	

訓練可能性の評価

表情識別訓練の適否を検討するための16パターン

訓練を特別に必要としない場合（1）

(A)		(B)		(C)	
②	○	②	×	②	○
③	○	③	○	③	×
④	○	④	○	④	○
⑤	○	⑤	○	⑤	○

※ (B) について、②が68%以上なら訓練不要
67%以下なら訓練対象者とする

訓練を特別に必要としない場合（2）

(ただし、正答率の高さや混同の傾向によっては稀に訓練が必要となる場合もある)

(D)		(E)	
②	○	②	×
③	○	③	○
④	○	④	○
⑤	×	⑤	×

※ (E) について、②が68%以上なら訓練不要
67%以下なら訓練対象者とする

訓練が必要な場合（1）：特に快—不快の混同に注意が必要な場合

(F)		(G)		(H)		(I)	
②	○	②	×	②	×	②	○
③	○	③	○	③	×	③	×
④	×	④	×	④	×	④	×
⑤	○	⑤	○	⑤	○	⑤	○

訓練が必要な場合（2）：特に一貫した回答傾向に注意が必要な場合

(J)		(K)	
②	○	②	×
③	×	③	×
④	○	④	○
⑤	×	⑤	×

訓練が必要な場合（3）：感情間の混同が著しい場合

(L)		(M)		(N)		(O)		(P)	
②	×	②	×	②	×	②	○	②	○
③	×	③	○	③	×	③	×	③	○
④	×	④	×	④	○	④	×	④	×
⑤	×	⑤	×	⑤	○	⑤	×	⑤	×